

---

# HoneySick

惟生冬子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Honey Sick

### 【Nコード】

N2315Q

### 【作者名】

惟生冬子

### 【あらすじ】

過去作品を少しずつコピーペーストでUPしていきます。お付き合い下さい。ついたー @honeysick (C)SINCE2001 惟生冬子

## CLICK 1

視界は濁る。もう一度、唇に運び、強く吐くと、これまで以上に周辺は濃く澱む。祈りに準える様に目を伏せ、存在を途方に暮れさせぬ様に気を付ける。焦げかけるフィルターは灰皿へ、眠る雄猫に外出を告げ、電気を消す。鍵を回した。

唯一の防寒具は重いコート。脱いで縦に折り畳み、席に掛ける。

「ご注文は？」

メニュー表を閉じる。ウェイトレスはカウンターの中に入り、私は煙草に火を点ける。ゆったりとした太い煙が漂う。左に視線を動かし、丸い時計の秒針を追い、そして全体に戻す。九時二十三分、二十三分の遅刻。だからもう来ていると思っていた。

でも居ない。

階下へ音は進み、やがて聴覚は我に返る。スピーカーのピアノ曲に重なる幾つかの雑談。ティーカップを近づけると蒸気で瞬間、頬が火照る。

「ヒツジ」

顔をあげ、リホを見た。水分のない肌にパウダー、だから粗い。器を傾け、瞼をきつく伏せる。リホは抑揚のない声で「何を見ていたの？」と詰まらない質問を投げた。

「別に何も」

再び顔をあげ、黒いコートの女性が居た席を眺める。漆黒の珈琲カップと灰皿はウェイトレスのトレイに移され、痕跡を拭う様に、テーブルは拭かれていく。

「どうしたの？」

「どうもしてない」

残り僅かなストロベリーティーからは微香もせず、正面で発される度の越した合成の香りに吞まれている。「お父さんが」スピーカのピアノ曲に重なる幾つかの雑談。ティーカップを近づけると蒸気で瞬間、頬が火照る。

再び顔をあげ、黒いコートの女性が居た席を眺める。漆黒の珈琲カップと灰皿はウェイトレスのトレイに移され、痕跡を拭う様に、テーブルは拭かれていく。

「どうしたの？」

「どうもしてない」

残り僅かなストロベリーティーからは微香もせず、正面で発される度の越した合成の香りに吞まれている。「お父さんが」リホは甲高く吐き、話題を変え、同意しか受け付けない意見を言い、質問を繰り返す。狂ってしまったわないう様に私とリホという纏まり以外で動いている現実には気を逸らす。でももう興味をそそる物が見当たらない。階下へ消えた女性について思いを馳せる。

彼女は、幾ら暖冬とは言え、暖房完備とは言え、あれ程までに冬を馬鹿にした服装はないと思う位、コートを脱ぐと服を着ていない。例えばノースリーブのワンピース一枚。腰までの黒髪が役に立っているとは考えられない。

一方的な姉妹会議で草臥れた精神は時折の、彼女の観察で持ちこたえる。約三度に一度、大体二十一時台は共有出来る。

彼女はいつも彼を待たせ、謝りもせず、暫く経つと自分勝手に置き去りにして帰っていく。

総合病院前の喫茶店、身振り手振り行われる家庭の罵倒、早くも砂漠化する醜い容姿。補うつもりの悪臭。

五感を関係のない場所で解放しようとしては彼女を捜す。季節錯誤と恋人への思いやりのなさ以外は普通に時間を使っているけれど、私はみとれてしまう。

浮遊する感受性は彼女へと注がれる。私は彼女に憧れて、彼女の

様に強くはなれない。彼女の様に存在は世界とは関係がないと言う態度では過ごせない。

昼が過ぎるまでは寝ていることが多い。世界とは決別出来ない。そして最早、長期的な離心の術は忘れてしまった。持て余す感情をあやす手段は睡眠しか残されない。脆弱な仮の世界としても私はきちんと救われる。時間を費やせば費やす程、世界に居なければならぬ時間は減る。だから行き詰まるまで眠る。

今朝は異物が侵入して目が覚めた。固定電話が鳴っている。目が覚めきれない事と寒い事と言いつに止むのを待っていたが、一向に静まらなかった。冷え切った床を五、六歩、歩いて、受話器を上げる。座り込み丸まれば少しは暖かいかもしれない。冷気は硬く動かない。

「はい」

「初めまして、コウキの弟です」

「弟？」

「昨日、兄が事故を起こしました」

右手を電話台にしているワゴンへ動かす。ワゴンも驚く程、適温を外れている。

悲しい位、かえって落ち着いてしまう。でも思えば正気の糸が切れてしまったに違いない。僅かに前のめりになっていた上体を真っ直ぐに戻す。

「病院は」

「言わなくて良い。私、行くつもりなんてないもの」

後方の布と硝子越しに救急車のサイレンとクラクションが聞こえる。サイレンが遠のくまでお互いに沈黙していた。

「判りました。また連絡します」

ワゴンのままの右手を持ち上げて送話口を押さえる。痺れる様な奥深い心音が聞こえる。

ブルタブを押す音が広く白いロビーに響いた。その直後、微かに足音が聞こえ、こちらへと向かってくる。服を着込むだけ着込んである中年の女性、顔を見ると伯母だった。

「圭哉」

長椅子に腰を掛けたまま、目の前で立ち止まった伯母を見上げる。息を切らして、続きを話しかけるまでに時間を要した。

「圭哉、戻ってきていたの？」

頷き、受付のドアを開ける看護婦を眺める。ナースキャップに季節外れに向日葵のピンが留めてある。僕は伯母と目を合わせた。

「聞いたと思うけど、今は母さんが付き添っていて、父さんは準備や連絡で家に居て」

「わかったわ。圭哉、もう帰るのでしょうか？ お父さんのお手伝いしてあげなさい」

「でもさつき、戻ってきたばかりで」

「紘ちゃんは本当に困った子ね。結局、一番、頼りにされているの判らないのかしら」

伯母は勝手に会話を終え、独り言を言い、ナイロンのバッグから取り出したハンカチで額を拭う。「それで何処にいるの？」

缶コーラを持ったまま立ち上がり、病室までの道程を指差しながら説明をする。伯母はハンカチをバッグに戻し、歩き始める。しかし突然、振り返り、声を出した。

「紘ちゃんの彼女には連絡したの？」

ダウンジャケットのポケットに手を入れ、銀のジップを触っていた。慌てて、ジップを落とさない様に手を出し、無造作に髪を掻き上げる。

「七時過ぎにしたよ。でも泣いて駆けつける人じゃなかった」

「どういう意味なの？ その人のせいで事故にあったも同然じゃない？」

その時、駆けてくる足音がして、僕と伯母は廊下の奥を同時に見ていた。窓の外がやけに暗い。いつの間にか雨が降っている。近付

いてきた細い体の背ばかりが高い女性は「丹沢さんの？」と言い、「父方の伯母、この子は弟」と返事を貰うと一揖した。茶色のパンツ姿でカーキの長いジャットを羽織り、短い髪と地味な顔立ちをしている。

「初めまして。紘輝さんとお付き合いさせて頂いています、石澤です」

啞然とする僕を無視する様に彼女と伯母は話し始めた。途中、伯母は不思議そうに僕を見て、溜め息を吐き、掌の膨らみを頬に当てる。

「圭哉、挨拶しなさい」

「何で？」

「何で、って何言ってるの、貴方」

「この人、一体」

「初めまして」

「あんた、誰だよ？」

「圭哉、何言っているの」

伯母は大声を出し、僕の腕を強く引き、後方へと連れていく。擦れるダウンジャケットからは軽い音が聞こえ、握り締める缶が潰れるコーラが弾む。石澤、と言う女が立ち竦んで、こちらを眺めている。伯母は声を潜め「いい加減になさい」と耳元で言う。僕は「違う」と告げた。

「あの人じゃない」

右手で左の目許を強く押さえ付けながら僕をじつと見ている仕様に、更に怒りが沸き、けれど、こういう事態にこういう場所で不注意でも殴りつけたりはしない様に制御する。僕は伯母の腕を払い、体の向きを変え、自分よりも背の高いその人に出来る限り、嫌な顔を向ける。

憂鬱、気を抜くと倒れてしまいそう。テレビ内の激しい陽気さが気分を害している。マキさんは空になったカップを覗き「お代わり

は？」と笑顔で言った。一瞥して考え「物凄く熱くて、甘ったるい牛乳を頂戴」と頼む。

「マキさん、私を学校に行かせないとリホに叱られるよ」

暫くして台所に行くとマキさんは空きパックを水で濯いでいた。コンロには牛乳の入った鍋が掛けられている。一度、壁に当てかけて、火元を凝視する。

「どちらにしろ私は叱られるでしょう」

乳白色のツープースに微かに皺を寄せ、マキさんは棚から砂糖の瓶を取り出す。緩い木漏れ日は、穏やかで退屈で、でも持て余す類ではない墮落の象徴の様。彼女は鍋をコンロから下ろして、膜ごとカップに注ぐ。

初めてマキさんが振り向く。「昨日はお父さん、どうでした？」きつくひとつに束ねた髪がなだらかな肩を滑る。私は壁に全身を押しつけ、スリッパに視線を落とす。目線が浮つく。

「調子良いみたい。先生も年明けに退院の話をしようって」

「本当？　今回は四力月も入院していたものね」

「でもリホが、家では介護出来ないから転院先を捜してほしいって」

「…どうして？」

「マキさんとお父さん、結婚した意味がないと思う」

「どうして？」

胸部で発生した痛みが土踏まずと喉元に拡がる。私は息を飲み込み、反らし、意味もなく袖を弄る。壁向こうでは乾いた番組が続く。声が芯へと滑り落ち、幾度と無く反響し、私の物と錯覚しそうになる。木漏れ日が徐々に撤退し、外の音が変わる。次第に音は激しくなり、辺りは既に暗い。コードを引いて、灯を灯した。

「吐き気がする程のショッキングピンクにしようかな、髪の毛」

マキさんはまだ湯気のたつ牛乳の入ったマグカップを電子レンジで温め直す。合成着色されていそうな光の中を回る。「冗談だよ、全部」



質が悪い。思い出せない。

カーテンを開け、外側の光を部屋に染み込ませる。雄猫が脚に擦り寄り、私は彼を抱き上げる。

「良い子」

台所まで抱え、赤いプラスチックの食器を床から持ち上げる時に彼を降ろす。丁寧に洗い、右に水道水、左に猫用のドライフードを入れ、傍らに置いた。勢いよく食事を始め、私はその場に座り込み、様子を伺う。そして腕を伸ばす。煌めくのは爪ばかり。

腕を膝へと戻し、浮かんでくるピアノ小曲を口ずさむ。放心している様な気色に、猫のドライフードを囓む音だけが聞こえた。

膝に額を載せる。コーキの淡い横顔が繰り返し挟み込まれる如く、瞼の奥に現れて、瞬間、息の仕方が常軌を逸してしまいそうになる。指の腹を唇に当て、瞬きをする。何度も何度も。食事を終えた猫がシンクに飛び、水をせがむ。

「どうしても水道から飲みたいのね」

蛇口を捻り、らしくない、と思いながらもシンクに頭垂れていく。凜として、どうする場合も憂えてはならないと思いつむ。

眺めていた娯楽番組が終わった後、電話に出たのは母だった。父は就寝前に晩酌をするのが日課で、母は二十一時を目安に簡単な肴を作るのが日課だった。子供の頃、僕と兄は夜更かしをしては小さな宴に参加した。両親は特に怒る事をしなかった。

僕は毎週、どうしようもない番組をみてしまう自分に嫌気を感じながら、相変わらず父の隣で発泡酒の缶を開けていた。

音が鳴る。

この時間の電話はさほど珍しくなく、多分、家族全員が父の姉と思っていた。伯母は深夜が近付くと広い部屋の無音に耐えかねる。母は廊下に出た。

父が怒鳴り呼び止めたが無視をした。帰宅と同時に階段を上り、手前の自分の部屋に入り、後ろ手にドアを閉める。外の闇との同化に伴い温度は低い。スイッチを押し、明るませ、机の上のアドレス手帳を持ち上げ、ポケットから携帯電話を取り出す。兄のアドレス手帳を盗み見る如く、酷く緊張しながら一枚ずつ捲り、IとNの欄を丁寧に調べた。それから、H、の欄に書かれた八セの番号を殆ど勢いで打ち、発信し、息を潜める。八回目が鳴る。

「はい」

「コウキの弟ですけど」

「はい」

「ひとつ聞いてもいいですか？」

「何を？」

「貴方は一体何ですか？」

昼間から考えていたにも関わらず、不躰な質問をしてしまった。一呼吸をした後「何って？」と言う。僕は敷いたままの布団に蹲り、毛布を膝に掛けた。暫く整理していたけれど順序も無難な言い回しも浮かばず、また勢いに任せる。

「今朝、僕と話したのは貴方ですよね？」

「ええ」

「貴方は兄のことを好きはらずです。そうでしょう？」

「どうして？」

「答えて下さい」

質問は途方も無い長い間、互いを黙らせ、でも本当は取るに足らない短い時間だったのかもしれない。「もう今はわからない」そう返され、予想外の答えに行き詰まり煮たっていた神経が行き場を失う。

「どうかしたの？」

我に返り慌て、気持ちを整え、手探りで携帯電話の音量を上げていく。階下のざわめきが一気に失せた。

「昼前に泣き腫らした目をした女性が兄に会いに来ました。イシ

ザワニチカという人です」

斜向かいの家の窓の灯が灯り、そしてカーテンが引かれる。ふと、様々なリアルが押し寄せて、景色が徐々に滲んでいく。理解して、でも実感せずに既に一晩が経とうとして、今更、全てタイミングを損ねてしまった。」

「今朝、貴方と話した後」

正直、迷つてもいた。でも気分は行き場を欲していた。僕は吐き出す様に、彼女に告げる。

「兄は死にました」

先に沈黙を破ったのは彼女だった。

「ね？」

「え？」

「形見分けはしてもらえないの？」

遠方で犬の遠吠えが聞こえ、答えを捜さないといけないと考える程、空回り、何も浮かばず。

「何が欲しいのですか？」

せめて、そう訊ねる術で落ち着こうとする。慰めとしてポケットのジッポを表に出し、何度も撫ぜた。

「コーキ」

「え？」

「コーキそのもの」

「どういう冗談ですか？ 例えば、これとか、兄の机にあった銀の」

「ジッポ？ それは私の物だけれど、もういい」

僕は手を滑らせたと自身に言い訳をして、ジッポを固い床に落とす。音は彼女にも聞こえたかもしれない。投げ遣りに似て、更に問う。

「じゃあ、他の物で欲しい物がありますか？」

「じゃあ、貴方」

そしてまた沈黙。僕は考え込んでしまう。けれど本心は判らない。

毛布が温く緩い衝撃を受ける。彼女は弾みに過ぎない。それは間違えないと思う。ただ、もう堰をきった様に止まらない。

雄猫が脚に擦り寄り、私は彼を抱き上げる。

猫の耳の後ろを掻く。老け顔は固く目を閉じると余計に老ける。

「良い子」

触るのを止め、煙草に手を伸ばす。

コーキの事故から十日が過ぎ、少なかった外出は今は数に入らない程度にしかない。

世界に対しては平伏せるほど愚かであるという事実。しかし狂う基準は超えられず、けれど立ち去る意欲もない。せめて時間も空間をも狭ばめゆく事でのみ辛うじて、どちらを選ばず耐える。私は狭さを欲した。

「シエス」

私が今も此処にこうして居る事を許してほしい。千切れてしまわない様に見ていてほしい。

世界がコーキならば、せめて留め具としてシエスを。

二回目の電話を切った後は不覚にも泣いて、つられたと言いついて必死に押し殺して、しかしあげくには息まで纏れさせた。

もう彼へと向かう物はとうになく、彼の何かであろうともせず、彼には何一つ望まずに居たつもりが、嫌うに足るだらう理由が存在してもなお、嫌うことすら出来ず、恐怖はただただ失うことだけであったとして実際失ったところで、具合が上手く行くわけもなく。

知れば、全ては自ら生みだし自ら終えたと知る。

ならば居ぬ人の気配に溺れない様。

猫のシエスは黒い枕の上で丸くなり、彼も黒い体をしているから一繋ぎのよう。引き出したり、引っ込めたりしていた一本の煙草をすっかり引き出し、火を点ける。白い気体は天井へ上がり、電灯の灯りに照らされる。指先が勝手に震える。

たかが人を無くしただけ。

苺が好き、なんて、デマコギーを流したのは誰だろう。

「マキさん、これ、食べちゃうの？」

真四角の箱を開け、トレイを横に引く。ドーム型のスポンジにはたつぷりと生クリームが塗られ、太った子供の天使が乗っている。二十一日と言うのにクリスマスケーキが届けられる。リホが知ったら激怒するだろうと思う。

「昼食とおやつを兼ねて二人で食べてしましましょう」

「でも、マキさん」

「どちらにしろ、あつてはいけないものだから。今、同じ物を注文してきたの、二十五日に届く様に」

マキさんはザルいっぱい洗いたての苺をテーブルに置く。私はタートルネックのセーターに顔を埋め、真っ白いスポンジと瑞々しく赤い果実を交互に眺める。果実は細い指に摘まれ、ケーキの方に動かされていく。「やめて」と思わず叫んでしまう。

「芽恵さん？」

「ごめんなさい。私、嫌いな。香りは寧ろ好きなのに、食感とかがどうも駄目で、無理しないと食べられないの」

苺をザルに戻し、彼女は目を瞬かせる。そして何かを言おうとした時に重くインターホンが鳴る。同時に大きく動揺し、お互いを確認し、それからマキさんは点滅する外線ボタンに怖々と手を伸ばす。青ざめる私に彼女は人差し指を唇に運び、合図を送るとボタンを押した。

「はい。あら？ あ、はい。待つて」

インターホンの受話器が差し出される。手を伸ばす事を躊躇い、でも受け取る。

「丹沢さん」

マキさんは箱の側面に貼り付けられた袋を剥がし、中から口ウソクを取り出す。

「丹沢さん？ え？ どうして？ 少し待つて。開けるから」

壁に戻し、跳ねた髪を手ですく。「通知表を届けに来てくれたみたい」私はスリッパを深く履き、勢いよくダイニングの扉を開いた。「あがつて頂いたら？」

庭の無味乾燥な風景の中、黒いキャップを被り、白いダウンジャケットを着た彼が茶封筒を片手に立っている。思わず呆氣に取られる。

「学校帰りじゃないの？」

「一応」

彼は茶封筒を渡しながら、乾いた声で笑う。冬の空気が周辺だけ解ける。

「話があつて教室に行つたの。そしたらヒツジの担任が現れて、これ渡されて、任せた、とかほざいて」

「そうなの？ ごめんなさい。ありがとう。あ、ね、ケーキ食べない？」

彼をダイニングに案内する。座つて貰うと、マキさんが台所から顔を出す。縛つた髪が生き物の様に動いた。

「久し振りね。前に進学するつて言つていたけれど、もう決まつた？」

「はい。教師志望だから、そういう大学に」

手袋を外し、キャップを脱ぎ、指定バッグを置き、ジャケットのファスナーを下げる。色素が薄い、印象なのかもしれないけれど、光に晒された彼は透けて淡い。睫に絡む。

「八日間休んで、終業式には出たけれど、ヒツジは学校には行つていたの？」

封筒をチェストに置いた後、湯で温めた包丁でケーキを切る。天使はトレイの隅に放棄した。ふと縞模様のロウソクに気が付く。

「保健と美術と古典のある日だけ」

「もう留年するなよな。来年、一緒に卒業したかつたのに」

「ね、丹沢さんの欠席は進路関係？」

「いや。忌引き。兄貴が事故死」

私は包丁を握ったまま、口を半端に開いて、彼を眺める。反らさず肘をついた姿勢。

「いつ？」

「丁度十日前の夜」

「ごめんなさい。知らなかった」

「もう落ち着いた」

湯気がたつ珈琲と牛乳を運んできたマキさんも話を聞いてしまい、表情が曇り、私と彼を上手に自分から外した。でも直ぐに「お兄さん、幾つだったの？」と戻ってくる。

「二十七歳です。良かったらマキさんも座って。府に落ちない事があるの」

遠慮がちに私に許可を取った後、座り、ケーキを手元に引き寄せて盛る。丹沢さんは生クリームだけをフォークで掬い、私も真似る。そして彼は、兄の葬儀に来た彼女と事故の連絡をした彼女が同一人物ではなかった、事態が呑み込めないでいる、と簡単に纏めれば、そつという話をする。

マキさんは毒々しい毒を持ち上げたまま思案顔で訊ねる。

「つまり、彼女が二人居るの？」

「判らなくて。ただ葬儀に来た人は兄から名前すら聞いた事なし、第一、兄が好むと思えない様な人だから」

「どういう人なの？」

「綺麗じゃない人」

昼の光が彼に宿る瞬間に目が止まる。緩い拳を頬に当て考える。余り深入りはしないけれども。

マキさんがケーキの隠蔽に励む間に、私は丹沢さんを駅まで送った。明日から冬休みと思うと気を使わず外出が出来る。彼はキャップを更に深く被り、ポケットに手をつ込む。少しも学校帰りには見えない。

「ご馳走様」

「こちらこそ、ありがとう」

彼を見上げた流れとして後方の時刻表を映す。「後十七分」

「三学期になったら三年生って自由登校になって、それで卒業して。春になったら丹沢さん、居ないんだね」

「でも大学、高校の直ぐ傍だから」

意地悪に笑い、ポケットから手を出して私の肩を親しげに叩く。手袋越しの指先にさえ安らかになる。

「丹沢さん、一年の時、クラスの子達に好きな人を訊かれて、ハセって言ったのを覚えてる？」

「覚えてない。そういう事言っただけ。ハセの事は本当に、この前、声を聞いただけで、あとは何も知らない」

彼は浮いた手を顎にあてる。私は今更、嫉妬を覚える。

灰青色のダブルコートのベルトを意味なく弄る。蛇がきつく絡まる様、その頭を揺らす様。彼は指定バックから定期券を取り出し「ね」と言う。

「丹沢さんって、やっぱり違和感を感じる。確かに学年的に先輩後輩だけれど、もう学校関係なくなるし、ケヤで良いのに」

スカートとハイソックスの間の露にされた皮膚が冷氣に触れる。思わず、くしゃみをする。「そんな事を言われたら、もう話しかけられても返事が出来なくなる」

「ヒツジの父親って、今もこの先の病院に入院しているの？」

「そこは退院したけど、また悪くなって今は総合病院にいるの」

「もしかして最近、病院前の喫茶店に行った？」

唐突に丹沢さんに訊ねられ、頷くと、彼は僅かに反応を示す。

「兄貴もよく行っていたらしくて、兄貴、病院の給食室で働いているから」

警報機から音がする。

「ハセ、に会つかもしれない」

そして電車がホームを出ていき、踏切り前に移動した私は彼を見



つける。不自由に手を振る。短く彼も振り、残像が溶ける。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2315q/>

---

HoneySick

2011年1月26日13時56分発行